鳥取大学
Tottori University

国際交流センター
2023年度

メキシコ
海外実践教育
プログラム報告書

メキシコ海外実践教育プログラム

2023年8月17日～9月29日

プログラムについて

本プログラムは、メキシコ・南バハカリフォルニア州のラパス市で、メキシコ北西部生物学研究センター（CIBNOR）および南バハカリフォルニア自治大学（UABCS）の協力のもと実施する、フィールドワーク・講義・語学教育を融合させた全学プログラムです。参加学生が、グローバル社会で活躍する上で重要なグローバル人間力を強化するために、現地の教員及び学生、研究者とが協働し、アクティブ・ラーニングを中心とした実践的な内容のプログラムにより、参加学生の主体的な学びを促す仕組みとなっています。

本プログラムでは、参加学生が異環境・異文化の中で、言葉の壁や事前に持っていた知識・情報と現実の差の中でさまざまな困難に直面しながら成長し、現場に強い、打たれ強い、変化に強い「タフで実践力のあるグローバル人材」に成長することを目指しています。また、プログラムでの様々な課題についての直接的な体験を通じ、これらの課題を自らのものとして捉え、身近なところから解決に繋げる価値観や行動力と、グローバルな倫理観の育成を目指しています。プログラム最終日には、参加学生自ら関心を持ったテーマに対して「今すぐ行動に移せそうな解決策やアイデアを提案する」という課題に取り組みました。本報告書には、2023年8月17日から9月29日までの日程でプログラムに参加した学生6名のメキシコでの気付きや学びについての考察がまとめられています。

本プログラムは、平成17年に文部科学省「戦略的国際連携支援事業」の採択を受けて開始し、今年で15回目の実施となりました。コロナ禍により派遣を中止していましたが、CIBNOR、UABCS両機関の関係者、およびJICAメキシコ事務所の皆様のご協力のお陰で、この度4年ぶりに実施することができました。改めて、ここに感謝申し上げます。

スケジュール

	1st Class 09:00 – 10:30	2nd Class 10:40 – 12:10	3rd Class 13:00 – 14:30	4th Class 14:40 – 16:10	5th Class 16:20 – 17:40
8月17日(木)	成田空港出発→メキシコシティ到着				
8月18日(金)	JICA事務所訪問(日墨の国際協力、キャリア形成) メキシコ国立大学見学(20世紀現代史) コヨアカン(植民地時代初期)				
8月19日(土)	メキシコの歴史遺産見学(テオティワカン遺跡)				
8月20日(日)	MEX-LAP 移動日				
8月21日(月)	UABCSキャンパスツアー、オリエンテーション				
8月22日(火)	Spanish 1	Spanish 2	English 1	English 2	English 3
8月23日(水)	English 4	開講式		Spanish 3	Spanish 4
8月24日(木)	Spanish 5	Spanish 6	Spanish 7	博物館	
8月25日(金)	Wallart workshop				
8月26日(土)	Wallart workshop				
8月27日(日)					
8月28日(月)	BCSの植生	English 5	English 6		
8月29日(火)	Spanish 8	Spanish 9	English 7	English 8	English 9
8月30日(水)	Spanish 10	Spanish 11	English 10	English 11	協働学習
8月31日(木)	フィールドワーク講義(自然科学、社会等)			中間発表準備	
9月1日(金)		Spanish 12	中間発表		
9月2日(土)					
9月3日(日)					
9月4日(月)	Fieldtrip Santa Rosalia (鉱山地帯)				
9月5日(火)	Fieldtrip Santa Rosalia (火山地帯、乾燥地のオアシス)				
9月6日(水)	Fieldtrip Loreto (コロナド島、生物多様性)				
9月7日(木)	Fieldtrip Comondu(宣教師の影響)				
9月8日(金)	Fieldtrip Comondu (水資源不足、伝統農業)20時到着				
9月9日(土)					
9月10日(日)					
9月11日(月)	フィールドワークのふりかえり・発表			Spanish 13	
9月12日(火)	Spanish 14	Spanish 15	English 12	English 13	
9月13日(水)	講義:BCSの都市と地方問題				
9月14日(木)	Fieldtrip 都市課題の見学			English 14	English 15
9月15日(金)	講義:BCSの都市と地方問題2		働学協習		
9月16日(土)	Mexico´s Independence day				
9月17日(日)					
9月18日(月)	Field Trip to Balandra: 自然保護区				
9月19日(火)	講義:課題解決のための応用研究(アクアポニックス)				協働学習
9月20日(水)	Field Trip to San Antonio: 小学校訪問(遠隔地域の教育事情)				協働学習
9月21日(木)	講義&Field Trip: アクアポニックスコミュニティキッチン			最終発表準備	
9月22日(金)	最終発表準備				
9月23日(土)					
9月24日(日)					
9月25日(月)	最終発表・振り返り				
9月26日(火)	閉講式				
9月27日(水)	La Paz Departure→メキシコシティ 夕方出発				
9月28日(木)	メキシコシティ発 深夜便				
9月29日(金)	成田着 午前6時20分到着→解散				

メキシコプログラム報告書

工学部社会ｼｽﾃﾑ土木系学科4年　竹内滉哉

はじめに

この報告書は、2023年8月17日から9月29日までの期間に、メキシコシティおよびラパスで行われたメキシコ留学プログラムに関する内容をまとめたものです。プログラムの目的は、文化交流、言語習得、地域課題の理解、および国際協力の促進等でした。以下に、プログラムの主要な出来事と学びを報告します。

スケジュールの概要

日本→メキシコシティ (8.17～8.18)
メキシコシティ (8.18～8.20)
ラパス (8.20～9.27)
ラパス→メキシコシティ→日本 (9.27～9.29)

メキシコシティでの滞在

8月18日、成田国際空港からメキシコシティまで13時間のフライトを経てメキシコシティに到着しました。長時間フライトによる疲れや時差ボケのような症状があって、全体的に雰囲気が暗く、翌日にもまだ体調が優れない日本人学生もいました。

8月19日にはJICAメキシコ事務所を訪問しました。JICAの現在の活動内容や現状を現役職員の方が、自らの経歴等を交えつつ紹介して下さいました。

その翌日にはテオティワカン遺跡の見学で、昔、この地で暮らしていた人々の様子を確認することが出来ました。様々な遺跡や過去の建造物を見ましたが、中でも特に太陽のピラミッド、月のピラミッドの迫力はこの報告書を書いている今でも忘れられません。

UABCSにおいて

開講式

8月23日、開講式は鳥取大学とCIBNOR、UABCS両方の学長、副学長等の挨拶から始まりました。鳥取大学側の生徒はスペイン語と英語を織り交ぜた見事なスピーチをしていました。鳥取大学からはTシャツを贈り、UABCSからは帽子をいただきました。式終わりには食事会を行い、非常に良い雰囲気で留学プログラムが始まりました。

開講式の様子

パートナー学生

UABCSではそれぞれの日本人学生にプログラムの間、手助けしてくれる「パートナー」が決められており、大学内の施設案内、飲食店等における現地の言語による注文方法、バスの乗車方法等、挙げれば切りが無いほど様々なことを教えていただき、加えて、遠方に向かう際の配車をしていただいたりとプログラム中には大変お世話になりました。

講義内容

UABCSにおいて行われた講義内容は、主にスペイン語と英語の２つでした。4週間にわたってそれぞれの講義が開講されました。スペイン語の授業ではバディの学生の手厚いサポートにより、効果的な学習が可能でした。英語の講義では、グループディスカッションが主体で、現地の学生とのコミュニケーションを通じて英会話スキルを向上させることが出来ました。また、座学に加え、課外授業や壁画をはじめとするメキシコ独自の文化に触れられる画期的な講義等が合間に組み込まれており、退屈しない、工夫されたカリキュラム構成で、講義にも集中して取り組むことが出来ました。

課外授業

課外授業は9月4日～9月8日の5日間にわたって行われました。9月4日、5日はSanta Rosalia

（サンタロサリア）という町で、漁業や鉱業、歴史について学びました。

9月6日はコロナド島に向かいました。ここでは長い時間経過による地形や気温変化による地質や植物の生態系変化について主に学びました。

9月7日はSan Javier（サン・ハビエル）地域の小学校を訪問し、小学生に日本の遊びを紹介し、交流しました。その後、バハカリフォルニア州の中で二番目に古く、一番保存状態が良いSan Javier Missionという教会を訪れました。午後はオリーブやグアバ等を育てている一般の農家にお邪魔し、現地の農業とはどのようなものかを近くで見学することが出来ました。

9月8日はSan José de Comondú（サン・ホセ・デ・コモンドゥ）の教会を訪れ、オアシスの形成の仕組みや水問題について学びました。その後、隣町のSan Miguel de Comondú（サン・ミゲル・デ・コモンドゥ）の農園を訪れ、アボカドやサトウキビ等を見せていただきました。

コロナド島でのアクティビティ

5日間のフィールドトリップを通して、メキシコの生活や直面している課題を知ることが出来たことに加え、私たちの「当たり前」という概念が大きく変わりました。

プログラムを通じた学び

このプログラムを通じて、地元の課題や貧富の差についての認識が高まりました。水不足問題や環境保護の重要性について新たに様々な知識を身に着けることが出来ました。また、メキシコの独立記念日の祭りやパレードを通じて、メキシコ文化を実感し、国際交流の重要性を再認識しました。

結論

このメキシコ留学プログラムを通じて、異文化理解、言語習得、国際協力に関する重要な経験を積むことができました。今後も、学んだことを活かし、国際社会での貢献に努力していこうと考えております。

さいごに

本留学プログラムにおいて主にメキシコシティでの引率をしていただいた箕輪先生、UABCSでは終始お世話になったエディカ先生、並びにメキシコ人パートナーの方々、そして忙しいスケジュールの合間をぬって最初から最後まで引率していただいた蕪木先生に心深く感謝申し上げます。最後に、メキシコでの日々の生活において，何事に関しても協力的であった日本人学生の皆様に感謝申し上げます。

サンタ・ロサリア教会

メキシコ短期研修を振り返って

工学部機械物理系学科2年　矢田航希

まず僕がこのプログラムに参加した理由は、第一に海外に行ってみたかったからである。実際に海外に行って自分の中で異文化がどんなふうに映るか知りたかったからである。また他にも語学力を高めること、異文化交流をすること、文化的背景の異なる人と協力して何かを成し遂げる経験をすること、そして留学後も連絡を取り続けられる友達を作ることなどであった。

研修の初期では、メキシコという国の歴史について深く学んだ。かつて植民地だったメキシコは日本とは全く異なる文化的背景を持つことを学び、そこからメキシコの風俗や習慣について現地の人々やメキシコの街並みの様子から伺うことが出来た。訪れる国の現状を知ることはとても重要なことであると気付いたし、何より現地の人と交流する中で、拙いスペイン語を理解しようとしてくれる温かさに多く触れることができ、また現地の学生の英語力や様々なことに対する知見の差を痛感させられた。メキシコは英語とスペイン語の両言語が飛び交う国だと思っていたが、実際の状況は、日本が日本語の国のようにメキシコは予想よりはるかにスペイン語だけの国だと感じた。この点で日本と似たような背景を持っていることがわかった。この点から現地の学生の英語力のレベルに驚かされた。また自分の専門の域を超えた事柄に関しての知見がとてもあり、一人一人が自分の意見をしっかり持っていた点でも自分たちとの差を感じた。このプログラムでは主に環境に関する問題や、水問題、観光都市としてのあり方といった、自分の学問領域である工学では決して勉強しないような事柄が取り扱われることが多かったため、自分は背景知識が乏しく、自分の意見を持っていないことを痛感させられたし、意見があったとしても英語でうまく伝えられないことが多かったが、現地の学生は自分たちの学問領域とは違うことでも意見を持ち、それを英語で発信できる力を持っていた。また、学ぶことに対しての姿勢がとても積極的だと感じた。やらされる勉強ではなく、やりたいからここにきて学んでいるんだという感じがとても伝わってきた。その姿勢は積極的に質問をする姿から特に感じられた。将来について話す機会があり、現地の学生と話していたら「今のメジャーが終わったら次はこれとこれとこれを学びたいから、どこそこの大学に行こうと思っているんだ」というような話をしてくれることも

多かった。留学前の自分は、自分のやりたいことが分からず、なんとなく単位をとるために勉強していたが、大学生として学ぶ意義を再確認するきっかけになったし、自分がやりたいことのヒントを得られた。

　またこの研修における課題として「自由研究」というものがあり、この研究を進めていくにあたって、まさに英語を使って本格的に意見交換をする必要があった。日常トークとは違い、研究のことに対して少し専門的なことを話し合う必要があったり、自分主体で研究をする中で自分が根拠のある意見を持ち、パートナーに伝える必要があった。ここで言語の壁に何度も直面することがあったが、あらゆる方法を駆使して根気強く伝えようとすれば、パートナーはそれに応えて理解しようとしてくれた。この経験から、お互い第二言語を使って協力し何かをやり遂げることの難しさを痛感したと同時に、今後同じような事でさらに専門的な内容になったとしてもやりきれると思える自信がついた。

　この研修中、パートナー学生は自分たちの授業や課題がある中、授業の合間をぬって来てくれた。自分たちが最終プレゼンが迫り準備で焦っているときもサポートしてくれた。パートナー学生の心の寛大さにはずっと驚かされた。また研修を終えた今、自分は外国人留学生に対し日本語のサポートをしているが、教える難しさを痛感している。わかりやすくスペイン語を英語で説明してくれていたメキシコ人学生の英語の表現力や語彙の多さを改めて実感した。

　研修先のバハカリフォルニア州の南から北まで多くの地域を訪れ様々なものや人を見てきた中で、日本または鳥取との差を感じることができた。どこか海外に旅行をしようと思ったら、行きたい場所として有名な観光スポットが思いつく。しかし研修では、貧困層やその人たちをサポートしている人々を見た。整った環境ではない中でも、明るく学校に通っている子供たちに会い「なぜこんなにはつらつと楽しそうに学べているのだろう」と不思議に思うこともあった。自分は親の援助を受けながら整った施設で優秀な教授たちから授業を受け、何一つ困ることのなく（あると言えば勉強の内容が難しいくらい）生活できており、研修中に出会った子供たちとを比べると「圧倒的に自分の方が環境に恵まれている。」そんな当たり前なことに気づけたことが自分にとって大きな学びの一つだった。この留学を通して、語学の上達や環境問題などに対する知見を獲得できたことよりも、世界で学んでいる学生や子供たちや水面下でこれらの人々サポートしてる研究者など大人の方たちからインスピレーションを受けることができたことが一番大きかったと思う。

　今回の経験から、また海外に行きたいという思いや、自分が勉強している学問へのモチベーションを向上させることができた。グローバルな人材としての自分のキャリアにつながる第一ステップとして、この研修が間違いなく大きな財産になったと言えるように、今後も努力していきたい。

貧困地域にあるコミュニティキッチン

授業の様子

留学を終えて

農学部生命環境農学科3年　藤井海帆

私は一年生の時から第二外国語としてスペイン語を受講している影響で、いつかスペイン語圏に留学し、自分の語学力の改善・向上を図りたいという思いを強く抱いていました。そのため、三年生の現在に至るまでスペイン語の授業を受講し続け、国際交流センターが主催する語学強化コースのスペイン語にも積極的に参加していました。そんな中、新型コロナウイルスの影響で一時中断されていたメキシコ海外実践教育プログラムが再び開講されることを知り、思い切って参加してみようと思いました。

日本を出発し、13時間のフライトを終えた私たちは、最初の四日間をメキシコシティで過ごしました。メキシコシティではJICAの事務所を訪問し、メキシコで取り組まれている事業や海外協力隊の活動を紹介していただきました。さらに、世界遺産であるテオティワカンにも訪れ、その広大さに圧倒されながらも、遠い昔の文明に思いを馳せました。

テオティワカン遺跡

私たちが訪問した時期はちょうどハリケーンシーズンで、ラパスも洪水などの大きな被害を受けたと聞き警戒していましたが、その後は何事もなく穏やかで天気には恵まれました。ラパスの大学では、英語やコミュニケーションに対して苦手意識を持っていたので、授業について行けるか、メキシコの学生と上手くコミュニケーションを取れるか不安に思っていましたが、私たちがUABCSで学習を始めたその日から、メキシコの学生があらゆる面でサポートしてくれ、不安よりも楽しさや充実感を得ながら毎日を過ごすことができました。開講式では、英語とスペイン語での挨拶を担当させて頂いたのですが、その添削や発音の確認もサポートしてくれたため、緊張しながらも自信を持って話すことができました。

授業は双方型授業が中心で、講義を聞いてメモを取るだけでなく、学生が積極的に考え発言することで理解を深め、相手の意見を聞くことで視野を広げることができました。また、座学だけでなく、授業によっては街中に出てインタビューをしたり、博物館でメキシコについて学んだりと、メキシコの文化や歴史、生活などを肌で感じることもできました。フィールドワークでは、主にメキシコが直面する水に関する問題や、貧富の差、ゴミ問題などについて学びました。地域によっては、ハリケーンの影響もあり、河川から溢れた水で道路が浸水していたり、土砂崩れで通行が困難になっていたりと道路状況も悪く、隣の地域に移動するのにも不便だと感じました。また、ただでさえ水の入手が困難な地域で、下水道が整備されていないために生活排水をそのまま地面に流し、近くに流れている川や帯水層を汚染することで、さらに水資源が限られてしまうという悪循環が出来上がっている例も見られました。貧富の差に関しては、リゾート地から遠ざかるほど生活環境が悪く、上下水道はもちろん、電気も通っておらず、家も流れ着いたゴミなどで建てられているため、暑い日には家の中が50度になることもあると聞き、衝撃を受けました。このような、裕福な人々には良いサービスを提供し、貧しい人々には過酷な生活を強いる状況に対して、「不平等」という文字が浮かんだとともに、私たちの生活を見直すきっかけとなりました。海外で6週間も生活したのは初めてで、不便に感じる部分や困難に直面することも多々ありました。例えば、水道水が飲み水や調理水として使えなかったり、シャワーでお湯が出ず冷水を浴びたりと、日本では当たり前であったことが、メキシコにとっては当たり前ではなく、普段如何に「当たり前」を疑わずに行動しているかに気がつく良い機会となりました。また、ホテルにいる間は自炊をすることがほとんどで、慣れない食材や調味料を使いながらも、みんなで協力して料理をして生活をしていました。

メキシコにも、日本の調味料やお米は高価ですが置いてあり、日本食が恋しくなるということはありませんでしたが、生野菜や生魚は水が衛生的ではないという理由から、食することが出来ないという制約もありました。しかし、皆で作って食べるという寮生活のような体験が出来たことは、私にとって貴重な経験となり、また楽しい思い出となりました。

私は積極的に発言したり行動したりするのが苦手で、初めはパートナーに対しても自分から話しかけることが出来ず、話しかけてくれるのを待っていることが多かったのですが、一生懸命に伝えようとすると、相手も一生懸命に汲み取ろうとしてくれて、パートナーとの絆も深まったように感じたため、コミュニケーションを積極的に取ろうとする態度が大切だと感じました。この6週間の留学を終えて、語学力の上達が感じられただけでなく、課題に対して積極的に取り組み、解決策を講じる力の向上や、異文化に対する理解が深まりました。意思疎通を図るうえで、もちろん語学力は大切ですが、それ以上に互いの文化を理解し、尊重することが大切であると感じました。私たち日本人は、相手の気持ちを察して行動することがよくありますが、異なる言語・文化背景を持つ人々にとっては、「察し」のコミュニケーションスキルが通用せず、不安や不快な気分にさせてしまう場面も度々あったため、誤解や摩擦を生まないためにも、自分が思っていることや考えていることを言葉や文字にして伝えることが必要であると感じました。このプログラムを通して様々な人に出会い、多様な考え方や価値観に触れたことで、世界や視野が広がったように感じました。メキシコでの6週間は、私にとって大切な宝物です。関わってくださった全ての人への感謝を忘れず、この経験を将来に生かしていきたいと思います。

博物館での歴史の授業

留学報告

工学部機械物理系学科2年　森合隼人

春にあった台湾プログラムに参加した経験があったので、今回の留学は僕にとってそれ以来の二回目の海外留学でした。僕はこの留学に対し不安を感じていたものの、正直甘く見ていました。台湾での英語の授業は、日本人のみで授業を受けていたので、今回のプログラムは全く異なりました。大勢のメキシコ人と一緒に授業を受けるということに、とても驚き、自信がなく、全く話すことができませんでした。

このプログラムでは週に1・2回ほど言語の授業があり、その中で僕にとって精神的に一番辛いなと感じたのが英語の授業でした。メキシコ人学生二人がパートナーとして日本人学生一人一人に付き、共に授業を受け、授業中に課題として出される文法やリスニングの問題を話し合いながら一緒に解いていくというものでした。最低限の英語を用いて身振り手振りを駆使しながら意思疎通し、なんとか問題を解いていくことができました。

しかし、スピーキングの授業で、僕はメキシコに来て初めて言語の壁に直面しました。先生が現代における環境や現代社会に対する問題点を指摘し、それに関してパートナーと討論をするというものだったのですが、正直、全く歯が立ちませんでした。提示された問題点に対し、それぞれのグループに一つずつ課題が与えられていき、早速討論が始まります。自分も負けじと「さあ話すぞ」と口を開こうとしたら、パートナー同士で複雑な英語を使い討論し始め、その中に入ることができませんでした。急に「君はどう思う？」と質問されても、もちろん今彼らが何を話しているのか全く分からず、聞かれても何もわからず、困惑状態になってしまい、結局何も話し合うことができませんでした。焦燥感に襲われ、何もかも嫌になり、早くこの留学が終わってくれないかなと思うようになってしまうほど、目の前が真っ暗になりました。やる気がなくなり、もう適当でいいやと考えてしまっていた時間がありました。しかし、この留学の目的はそもそも英語力向上とコミュニケーション能力の向上を目指し申し込んだのと、両親の多大なる協力によって参加することができたので、「このままではいいわけがない」と自分

を奮い立たせました。もう一度気持ちを入れ替えて、メキシコ人学生と積極的に話し、「本来の目的を達成できるように頑張ろう」と決心することができました。今振り返れば、そういう意味ではいい経験だったなと感じます。

現地の学生との交流で印象に残った授業の一つに、アートワークというものがあります。これは絵に関する授業で、一人一人に白紙の紙が配られ、それに自分たちの好きな絵を自由に描く、言ってしまえば落書きをしようというものでした。ですが単に落書きで終わらず、それぞれが描いた絵を何個か選び、組み合わせて一つの作品にし、大学にある壁に描こうという授業でした。この作業を通して感じたことがいくつかありました。それは、言語が全く違う人たちと一緒に何か一つのことを成し遂げるという過程では、言語の違いや文化の違いなんてものは全く必要ないということです。ただ黙々と、時々身振り手振りをして意思疎通を図っていましたが、目的は同じなのですんなりと気持ちが通じ合い、外国人ということを忘れて、ただ楽しんで一緒に作業することができました。この授業のおかげで劇的に現地の学生との距離が縮まり、また協力することの意味の大きさについて改めて感じ、より楽しくコミュニケーションがとれるようになりました。

また、心に残った体験の一つにフィールドトリップというものがありました。これは、ラパスから遠く離れた古い町やその町の伝統的な産業に触れて学びを深めるといったものでした。僕はこの体験を通じて、日常でも、現在自分たちの周りに存在する物事や環境に対して、「なぜ今こうなっているのだろう、何か問題があったのか、昔は一体どうなっていたのだろう」などと考えられるようになりました。今こうなっているのならば何か原因があったのだろうと、「物事の本質に目を向けるようにしよう」という意識を持つことができるようになりました。また、この経験から日本人の仲間はもちろん、メキシコ人の仲間と協力することの大切さも学びました。現地の先生や翻訳してくれたメキシコ人学生の英語が聞き取れなかったときは、日本人学生に聞いたり、パートナーに今何と言ったのかを聞き教えてもらったりしました。ハードスケジュールで体力的にも厳しい状況でも、笑いあってお互いに助け合い乗り越えることができたなど、数え切れないほどの学びを得ることができたなと感じます。また、メキシコの古き良き街並みや、きれいな島や海を見て、メキシコだけでなくもっと日本以外の国について学びたいなと感じるようになりました。

正直なところ、自分はこの留学に参加する前は、メキシコに対しあまり良く思っておらず、メキシコは危ないところで、人は陽気かもしれないけど、何をされるのか分からないから、信用してはいけないという勝手な偏見や思い込みを抱いていました。しかし実際に行ってみると、少しは自分が思っていたものと想像通りなものもありまし

たが、ほとんど真逆で、本当に他人思いの親切な、そしてポジティブ思考な方々ばかりでした。自分が思い描いていた想像とは全く違い、良い意味で自分を刺激するような人たちに会うことができ、やはり現地に自分の足で行って、実際に自分の目で見て感じないと分からないのだなと改めて実感しました。

今回の留学で、自分のやりたかったことをすべてすることができたのかどうかは、正直なところ自信をもって頷くことはできないのですが、それよりもっと大事なことに気づけたように思います。ただ単に、見ず知らずの外国人にむやみやたらに話しかけ英語力の向上を図るという行動は、コミュニケーション能力は多少は向上するかもしれません。しかし量よりも質がやはり大切で、英語で相手が何を話したいのかをしっかりと理解し、言われたことに対し簡潔に自分の意見を主張する、いわば討論する能力が最も重要であるということに気づけました。またこれにより、新しい目標を自分の中で作ることができたのではないかなと思います。今回の留学をこの期間のみの経験とするのではなく、今後の学業や私生活に、留学で学んだ自発性、論理的思考能力、協調性を活かしていこうと思います。

街中でのスペイン語授業

プログラム報告書

工学部電気情報系学科2年　上田知也

「メキシコ」、そう聞いて少し怖いイメージを抱く人もいるのではないだろうか。私自身もそう思っていた一人であった。そういうイメージを持っていたからか、メキシコのプログラム当初は、日本が恋しくなってしまっていた時期があった。昔から海外に行くという経験は割とあったほうだが、「留学」という形で行くことは今回が初めてであった。日本語が通じない国で６週間、自身の語学レベルもあまりないため、余計に不安になってしまっていた。しかし、慣れない土地で人生初の留学というものはその不安をかき消すほどに実りのあるものであった。

このプログラムは、メキシコに行く前の事前研修から始まる。メキシコへは単なる旅行ではなく「留学」であるため、事前研修では現地に行って研究したい内容を決めた。自分は初対面の人たちと会話をするのが苦手であるため、ここからもう既に試練であった。外国人どころか日本人と話すのでも精一杯という状況では話にならないと不安で仕方がなかったが、皆同じ気持ちなのだと考えると次第に緊張が解れた。また、留学を既に経験している人も何人かいたのでそれもまた安心材料となった。

そして8月17日、遂にメキシコへと旅立った。初めはメキシコシティというメキシコの首都で観光のようなものを行った。慣れない土地に慣れる下準備と自分は捉え、しっかりと観光を楽しむことにした。プログラムに行く前から気になっていたテオティワカン遺跡、世界遺産に行けることがとても嬉しく実際に自分の目で見れることにわくわくしていた。実際、見ることは出来たが太陽のピラミッドの階段を登ることはできず少し悔しかった。

一通り観光がてらメキシコシティにてメキシコに慣れた3日後、遂にラパスへと向かい本格的に「留学」がスタートした。留学に関するしおりは事前に配られていたが、あまり確認しておらず、実際どのようなことをするのかを把握していなかった。そのせいで、現地に行っていきなり「パートナー」と組むことになってとても困惑した。なぜなら、自分の苦手分野である初対面の人間と話す

こと、そして慣れない英語のみの会話でしか意思疎通できないこと、この２つが大きな影響を自分に与えてしまい、まともに会話することが出来なかったからだ。ここで感じたのは、普段大学でも授業として隣の席の人と英語でコミュニケーションをとることは頻繁にあったが、ここでの会話はどうしても最悪英語が伝わらなければ日本語に頼ることが出来る、という安心感があったからこそしゃべることが出来ていたのだ。つまり、英語かスペイン語しか通じない現地の学生たちと会話をする際には、英語で意思疎通ができないと終わるということである。このプレッシャーは自分にとっては相当しんどいもので、この先６週間もやっていけるのかと不安でいっぱいのラパスでの生活が始まった。

ラパスでの生活にも慣れ、多少英語で意思疎通ができるようになったころに、問題が発生してしまった。なんと日本人同士における問題だ。内容としては、共同生活をするにあたっていつかは直面するだろうと思っていたことだが、それでなくても英語で日々生活し疲弊しきっている自分の体にはとても負荷のかかる出来事であった。ここで私は気づかされた。この留学は単なる語学力向上だけでなく、社会に出るための準備をする場でもあるのだと。人と同じ場所で助けあいながら生活するということは、お互いの価値観を尊重し合い、分かち合わなければならないということである、と改めて認識させられた。実際、この件に関しては話し合いの場を設けることにより何とか丸くおさまる着地点を見つけ出すことが出来た。

こういったこともあり、さらに疲れがたまっていた頃に、新たな試練が自分に待ち受けていた。それは「プレゼンテーション」である。プレゼンテーションというと、高校でも多少やったことがあり、そこまで大変なものではないだろうと少し高を括っていたが、よくよく考えてみると、ここはメキシコ。すなわち日本語でのプレゼンテーションではなく、英語でのプレゼンテーションをしなければならないのだ。さらに、６週間という短い期間にも関わらずプレゼンテーションが３つもあるというおまけつきだ。人前で発表するということがあまり得意ではなかった自分にとって、これは少し辛いものであった。しかし今振り返ってみると、我ながらよく頑張ったなと思うのと同時に、流石に短期間に３回もプレゼンテーションをすると、人の目線を見ながら話す、原稿をあまり読まない、質問に答える、など多少の余裕が後半につれて出てきていたように思う。

しかしこれだけで終わりではなかった。プログラムすべてを通して言えることなのだが、日本と海外の文化の違い、国民性による違いがあだとなってしまったことがある。それは「沈黙」という行動だ。日本人は例えば講義などで教授が「何か質問はありませんか」と聞かれると無言でいることが多い。そもそも真面目に講義を聞いていれば何かしら疑問点がわいてくるはずなので、この場で質問することが一番良いのだが、本当に質問がない場合でも日本人は黙っていることが多い。これは日本であれば「黙っている＝分かっている」と捉えられて事なきを得ることが多いのだが、メキシコにおいてはこの「何か質問はありませんか」と尋ねられた際に「ありません」とはっきり言わなくてはならない。これは黙っているだけでは本来相手に何も伝わらないからだ。黙っていて

も伝わるのは日本人の空気を読むという文化によるもので、海外では違うのだということを痛感させられた。

また質問をする際にも困難はあった。そもそも質問するといっても、当たり前だが講義は英語であるため、英語で質問しなければならない。しかし、リスニングテストよりもはるかに膨大な量の情報を整理し疑問点を見出すという作業は、自分の語学力ではとても負荷のかかることであった。さらに質問の返答も英語であるため、これもまた噛み砕いて理解しなければならない。まさに「英語漬け」といえる授業、そして日常生活であった。

こうして今回のプログラム全体を振り返ってみると、このように様々な困難があったことが思い出された。プログラム当初は単なる語学強化目的で留学に臨もうとしていたのだが、語学力だけではない様々なもの得ることができたと感じる。語学力以外で、一番大きいと感じることはやはり「積極性」だと思う。もともと自分はどちらかというと消極的なほうであり、あまり自ら行動を起こすタイプではなかったが、今回のプログラムを通して何か未知なことに対して挑戦してみようという心意気が培われた。

そして何よりも語学力が向上したことを実感できたことが一番嬉しい。メキシコの学生たちがあまりにも英語が流暢であったために自分の語学力が本当に上がったのか不安であったが、日本に帰ってから大学の英語の授業を受けてみるとその効果を実感した。以前に増して格段に会話をすることが出来ていたのだ。覚えている単語数が増えたわけではないが、留学したことにより英語を話すことへの「自信」を得ることができていた。結局、自分に足りなかったのは語彙力以前に「自信」であり、これが実は英会話において一番大事なことなのだと気づかされた。

最後になりましたが、今回のプログラムに携わってくださった先生方、そして現地の学生の方々、また共にプログラムに臨んでくれた鳥取大学の学生のみんな、本当にありがとうございました。今回のこの貴重な経験を今後に生かし、自分の夢に向かって努力していこうと思います。

小学生との交流